近代国家のさきがけ　薩摩の旅(2/3)

――日本最初の産業革命の地---

9/19/2016
北村社会福祉士事務所
代表　北村弘之

「薩摩の旅」の紀行文二回目です。

日本の近代化を推進していた明治政府が掲げていたスローガンは「富国強兵」でした。しかし、すでに江戸時代に、実行していたのが、今回訪問の地「薩摩藩」なのです。これらの実績を踏まえ、平成 27 年には世界遺産として登録されました。この世界遺産のうち、薩摩藩の「集成館(しゅうせいかん)事業」のご紹介です。

日本は今でこそ、明治維新の廃藩置県を経て中央集権的な日本国家になっていますが、江戸時代までは全国約 300 の藩が中心で、藩の大名がそれぞれの国を治めていました。しかも、士農工商の制度のため、どの階層も大名に忠実なる生活様式でした。そのような中、薩摩と長州も同様でしたが、この二つの藩は、他の藩のように徳川家から与えられた領地でなく、自らの戦で勝ち取ってきた領地だったことです。また薩摩と長州は徳川幕府(将軍家)に対し、参勤交代の義務は果たすものの、国家観は他の藩と異なり、自立心、向上心の方向性が育っていたようです。このようなことの積み重ねが江戸時代の後半の歴史を大きく動かしたと言われています。

さて、今回ご紹介します「集成館事業」は、幕末の 1851 年、第 28 代薩摩藩主になった島津斉彬が、アジア各地が西欧の植民地になっていることの情報を得て、これに対抗するためには、もっと強く、もっと豊かな国にしなければならないと考え、鹿児島の磯地区に製鉄(大砲の製造等)、造船(艦隊の船)、紡績(輸出)等の産業をおこしたのです。そして貿易でお金を得るため、薩摩切子などのガラス工芸品の開発(江戸切子の職人を呼び寄せた)、写真や電信、ガス灯などの等の実験研究にあたらせたのです。ちなみに、日本で最初写真に被写体となったのは斉彬公です。

今から、160 年前にこのような考えを持ち、殖産に励んだ風土はどこからきたのでしょうか? ここ集成館においても、鹿児島の知識豊かな地元のボランティアさんと一緒に回ったのでいろいろと話を聞くことができました。多分に、中国などの諸外国の情報入手が早かったことのようです。長崎での西欧人を招いたり、またオランダ語の書物からいろいろな情報を得たとのことです。ただそれを富国強兵策にもっていった英断は斉彬公であったと聞きました。前回の紀行文で西郷隆盛等の若手抜擢にあったのも斉彬公です。

異人館

しかし、このような事業を興すには多大な資金を必要とします。当時の藩の財政は限られており、一説では、斉彬公を藩主にすると財政逼迫で藩がつぶれるとの話もあったくらです。それでも、貿易等を通して資金を得ました。そして、海外からの機械の導入を機会に、英国から技術者を迎え入れているのです。現在もその技術者の館(異人館)は当時のまま残されていました。また、薩摩藩の若い人19 名を幕府に内緒で海外に派遣しているのです(13 歳の若者もいました)。この19 名の銅像は現在鹿児島中央駅前の広場にそびえたっています。

若き薩摩の群像

info@kitawel.com
HK Welfare

集成館事業のひとつ、「反射炉」はいわば鉄を作る製鉄所です。この技術が生かされ、明治時代に岩手県の釜石や福岡県の官営八幡製鉄所の事業に引き継がれていったというのに驚きました。

製鉄をする際には、石炭が必要でしたが、鹿児島には炭鉱がないため工夫します。それは「木炭」を使うことでした。堅い照葉樹林を切り出し、それを木炭にしたのです。その跡も鹿児島市内にはあるそうです。

また、「紡績」には、蒸気機関の動力を用いて、綿打ちから糸を紡ぐ撚糸、布を織る機織りまでおこない大量生産の草分けでした。この技術が生かされ、明治時代に「官営富岡製糸場」が誕生するのです。

造船においても、長崎に造船所を作り、それが現在の三菱造船所になっています。

まさに日本の近代化の礎を築いた事業であり、そのさきがけであった斉彬公の決断に感心しました。

もうひとつご紹介したいのは、「仙巌園(せんがんえん)」です。

1656 年に現在の鹿児島市の磯地区(集成館の隣)に、第 19 代藩主島津光久は別邸として築いたものです。ちょうど、真向いに桜島、そして錦江湾があり、桜島を築山として、錦江湾と池と見立てた雄大な庭園です。ここには、多くの賓客が招かれ交流があったようです。

私たちは、ここで現在行われている「御殿ツアー」に参加して、着物で正装したガイトの説明を聞きながら、いろいろと話を聞きましたが、現在の部屋数は 25 部屋で、当時はこの倍はあったということでした。ここでのお抹茶は格別でした。何ともいえない昔ながらの気持ちに浸ることができました。

仙巌園の庭先から桜島を見る

現在、集成館事業と仙巌園の展示と管理は、当主の島津家が一民間企業(島津興業)として行っており、管理の丁寧さと美観を保つ行動には驚きです。そして何よりも、島津家が 800 年近く継続できていることに驚きです。

以上

見事な薩摩切子